

## [会長講演]

## 獨協医科大学の「温故知新」

寺野 彰

学校法人獨協学園 理事長／獨協医科大学名誉学長

この度、第113回日本医史学会総会の開催を本学にお認め頂いたことに感謝申し上げるとともに、「会長講演」が必須とのことで、何を話せばよいかとためらいを感じた。なぜなら、本総会では、酒井シヅ理事長講演、新宮先生による獨協学園の歴史、日野原先生の栃木の医学史、中野氏による壬生町の医療史、小出氏による歴史観などが企画されており、その合間を縫って話さなければならない結構苦しい立場にあるからである。

したがって、本講演では、題名を「温故知新」と名付け、主に獨協医科大学の歴史と現状、そして輝かしい(?)未来を短い時間でお話しすることとした。ともかく演者の歴史観は、司馬遼太郎と塩野七生から成り立っているので、これらが医療史、医学史にどう反映されるのか若干心許ないものがある。そのつもりで聞いて頂きたい。

## 1) 獨協医科大学の始まりとその必然性

獨協医科大学は、明治16年(1883)に創立された独逸学協会学校が、新宮講演にあるように法科から医科へシフトしていった過程の中で、必然的に獨協学園の中に開設されたものと解している。その理由の第一は、日本の医学を創設した多くの先達が獨協中学出身であること、第二は中興の祖である天野貞祐先生が元来医師志望であったこと、第三は関湊元理事長の医大創立の執念が稔ったこと、第四に壬生町という立地が鳥居藩によってわが国有数の医療藩となっていたこと、第五に様々の障碍に対して町民の医大開設の熱意がこれを粉碎したことなどが挙げられよう。

## 2) 創立40周年に至る過程と現状

昭和48年開設の本学は、ほとんどどこからのサポートもなく高額の借入金で経営されてきた。そのため、教職員の苦労は並大抵のものではなかったようである。官からは冷視され、資金もない中で、特に栃木県の地域医療には大きな貢献をしてきたことは事実である。卒業生の多くは、栃木県の病院に勤めてその中枢となり、県内で開業するものも多く医師会の相当の部分を占めるようになってきた。ようやく最近、本学の栃木県における重要な役割を官も理解するに至り、瀕死の状態にある地域医療の再建に向けて本学を中心とした態勢を組むに至っている。この間、看護専門学校、越谷病院、日光医療センター、看護学部などを開設してきた。認知症疾患医療センター、総合周産期母子医療センター、とちぎ子ども医療センター、救命救急センター、PETセンター、ドクターヘリ導入など地域医療に大きく貢献する施設を構築してきた。医師不足、看護師不足という医療崩壊の根源に対しても、地域枠の創設、看護学部と専門学校による毎年200名余の看護師養成によって、その解決を目指している。医学・看護教育に関しても、知識・技術の習得は当然であるが、患者中心の医療を目指す基本姿勢を授業・部活などを通じて徹底的に“たたき込んで”いる。

## 3) 未来

平成25年(2013)、獨協学園130周年とともに、創立40周年を迎える医科大学は、記念事業として、教育・臨床棟の建設、記念誌などを企画している。それ以外にも、500名収容のドーミトリー、ホテル、

教育記念棟などを計画し、越谷病院の大規模な拡充、日光医療センターの充実など30年後を見据えたグランドデザインを策定した。低医療費政策に苦しめられた時代がようやく安定を見せ始め、真の地域医療に貢献できる態勢が整いつつある。これまで40年間の苦難に満ちた歴史を通じてようやくわが国有数の医科大学になろうとしている。未来のMayo Clinicを目指して全教職員が一致団結してがんばっている。

これが本学の「温故知新」である。ついでというのもどうかと思うが、司馬遼太郎の医学史への貢献も時間があれば若干述べてみたい。氏が生存されていれば、是非とも壬生町を舞台とした歴史小説を書いて頂きたかったのである。